

御手洗姓氏についての考察 (三)

伝承と系図の差異

前号で明らかにした如く、佐伯地方の御手洗氏祖とする若狭守信秀の佐伯入部は、応永二十七年（一四二〇）以前ということになる。ところで『佐伯史談』一三七号に示した清原系図によれば、信秀の末孫玄蕃信恭に至って、始めて「佐伯竹之浦住居」とあるが、その間、信秀は敗戦の将として佐伯氏に保護されたか、米水津湾に身を隠したかが問題となる。戦国時代の習いとして、敗戦の将を遇するのに、佐伯氏が当時米一粒とれない竹野浦に保護したとは考え難く、次に述べる伝承とあわせて、やはり落人として潜入したのが妥当だと考えている。

竹野浦に残る伝承とは、信秀三兄弟の流転・離散につながる悲劇が、「三兄弟の鏡」という形で言い伝えられている。拙著の一族の歴史物語『巴の鏡』の表題もこれ

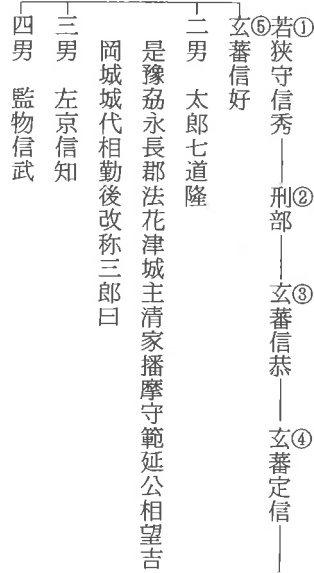
御手洗 一 而

（会員・川越市小堤）

によった。つまり、三兄弟が竹野浦・蒲江町・日向市細島の三か所に離散したという話である。但し、前記の清原系図では、四代玄蕃定信の三男監物信武が「弱冠名源大夫・蒲江浦住居」とあり、又定信の嫡子信好の二男源之丞信家が「日州細島住居」とあり、一応の流転時期を示しながら、伝承とかなりの年代的差異がある。先年細島を採訪のさい、『日向市の歴史』を編集された甲斐勝氏にこの事を話すと、「そう言えば島津が北上の時、日知屋城か日州勢の中に御手洗という名前を見た記憶がある」とのことであった。前記の系図による信家の細島住居は、時代が下ってすでに近世になっている。もしこの事実が確認されれば、系図よりも伝承の方がより真実に近くなるが、その後まだ確認に至っていない。又蒲江の

信武氏にしても、『鶴藩略史』によれば、高政に鯉魚（いわし）を献上した項（註1）があるが、信武が竹野浦から移住した直後にこの勢力は考えられず、又祖父信恭に関する蒲江の一石一字塔の伝承を考える時、御手洗氏が蒲江に入部した時期は、系図上の信武の時代よりも遡ることが考えられ、確認はないが伝承の方がより近いと推察している。ちなみに、三代信恭の妻は二神氏とあり、信秀流転後三代になってもまだ佐伯氏との縁は結ばれず、伊予忽那七島内の二神島を本拠とする二神氏との婚姻がみえる。二神氏とは河野大名や警固衆村上氏に従い、現存する「二神家文書」は伊予史研究に貴重な史料とされているが、（註2）この婚姻も大崎下島（御手洗島）と二神島との関係を如実に示している。

こゝで以後の論述の便宜上、一般に流布される清原系図と本系図に多少の差異があるので、本系図の略系を示しておくことにする。『佐伯史談』一三七号の一般系図と照合されたい。



註 清原系図では二代刑部と定信の二男太郎七道隆が欠落、あと同文故略す。

文献上にみる歴代

(一) 初代信秀については、落人の逼塞時代のためか伝承以外に文献上では現われない。

(二) 二代刑部については、本系図でも実名の記載がなく、しかも清原系図では欠落している。流転期の混乱を示し、この刑部も『榎牟礼実録』の「惟治公於日州三河内傷害の事」の項にある。「佐伯へ踏み止まる人々」の中に御手洗刑部とあり、実名がないのはこの文献より整

理したとも思われるふしがある。但し、信秀の流転が応永年間であり、佐伯惟治の惨事が大永年間であることを考えると、年代的に一世紀のずれがあり、この刑部は必ずしも前記実録の人物と符合しない。

(三) 三代玄蕃信恭については、妻二神氏は前述の通り始めて佐伯城主薩摩守惟治公に仕え、「為佐伯浦方代官」と系図にあり、流転以来三代にしてかなりの勢力の挽回が推察される。唯前記の刑部は、次代の梶牟礼城開城の事件を考える場合、この信恭に該当するが、以後玄蕃が世襲名になっている。

(四) 四代定信に至って始めて佐伯一族の野々下氏と婚姻し、この定信は系図では城主惟治と大永七年に尾高知で運命を共にしている。但し、世寿三十三歳は没年が惟治公と同年であり、同行した御供の人々二十名の中には実録にも明記されず年齢等作偽的なふしもあるが、戦死者式拾余人とあり、伝承とあわせて戦場死は事実であろう。

(五) 五代信好になると、多くの文献や文書にその史実が残されているため、項を改めて考察したいが、その前に系図上年齢に多少無理があるので指摘しておきたい。

信好は系図によれば元和二年（一六一六）の没年になっている。父の定信が四人の男子を残して三十三歳で戦場死したとして、大永七年（一五二七）当時信好を十歳と仮定すると、百歳近く長命であったことになる。又、梶牟礼実録の天正六年の耳川合戦討死家中一統の中に御手洗玄幡とある。玄幡は玄蕃であろうと思われ戦死したところになっているが、のちの竹野浦潮月寺の建立や過去帳の日付、慶長六年の高帳提出の署名、或いは元和二年の墓の刻年等から推察して、この時九死に一生を得たものと思われる。ちなみに弟の左京は後陣に名を連ねている。後述する毛利高政の左京に宛てた慶長十四年の肝煎（小役人・村役）申付等から、信好の高齢であったことは推察できるが、百歳とは少々長命すぎる。ところで、『大友興廢記』の「堅田合戦之事」の項によると、泥谷の尾崎から長池の戦で、佐伯勢の内御手洗源四郎・泥谷親次郎・木本内記戦死すとあるが、この源四郎について、現在までの調査の限り、どの家系にも該当者は見当らず、定信系の呼称か或いは古く竹野浦から出した堅田の御手洗の祖先かもしれないが、私見では系図の四代と五代との間にもう一代あっても不思議ではないと思っている。

定信と信好の間である。惟治公と運命を共にした定信と違つて、単なる島津戦における戦死だけに、歴代に入れない可能性もあり、一応考える必要がある。

信好四兄弟の略歴

(一) 信好については特筆すべき点が三つある。

(1) 天正十四年堅田合戦のさい、島津水軍は豊後水道を北上して陸上軍と合流を望んだが、佐伯水軍はこれを阻んだ。浦方を預かる信好はこの時の活躍で城主惟定から感状を贈られた。この感状は御手洗文書として現存しているが、宛書は米津衆中とあり実名はなく、日付が三月十七日とあるから翌年天正十五年に発行されたものであろう。となると、前記した堅田合戦で討死した源四郎とあわせて家督問題を考えてみる必要がある。

(2) 慶長六年の高政の佐伯入部に際して差し出した、下浦を統轄する「入津米津高」帳が現存する。日付は六月十六日、竹野浦、御手洗玄蕃とあり、黄色ばんだ蟬引きの和紙に石高を和綴じした簿冊である。詳細な諸本に引用されているので省くが、^(註3)この時系図から信好の年齢を計算すると八十数歳の筆になる。原本は八十数歳の筆

勢にしては若く、後日整理したとも思われるが、和紙の質や和綴じの技術など専門家の鑑定が欲しいところである。何れにしても、この時の玄蕃の署名は、慶長六年当時、下浦を預かっていた玄蕃の生存を裏づけている。

(3) 竹野浦朝月寺の建立は、毛利藩の寺社記にも、「開山月庵和尚、慶長十年二月初日遷化、位牌もこれあり候へ共、開基の年曆記さず」とあり、創始の年月は不詳であるが、慶長か慶長以前の開山は、一応信好の時代とみてよさそうである。

その他、信好の佐伯氏時代の史料では、天正十六年の別府朝見八幡宮文書として、歴代祈禱依頼者注文に御手洗玄蕃介とあり、^(註4)天正十六年参宮帳(伊勢参宮のため福島御塩焼大夫家に記帳)には、玄蕃・左京代参とある。^(註5)こうして、前記の石高帳を境にして、佐伯は毛利支配下に移行するが、佐伯遺臣で毛利高政に仕えた者はなく、玄蕃も同様庄屋職を決意したものであろう。高政時代のものとして、次の文書が御手洗文書として現存する。

- 1 毛利高政触状 慶長十四年十二月 五日
- 2 肝煎申付状 慶長十四年十二月二日
- 3 毛利高政触状 年不詳 閏十二月二日

- 4 毛利高政書状 年不詳 十一月 七日
5 年不詳二月二三日付吉政書状他四点綴

右の同類は、市史に記載のもの、及び『大分県史料叢書』(三)として、佐伯藩の『温故知新録』や古御書写に所収されているため内容は省く。ついでながら、同書四八の高政触状にいう高嶋右近身上相果候云々は、延岡藩で改易された高橋氏のこと、竹野浦に現存する正文も高橋であり、古御書写の誤写が叢書編集者の誤写か訂正を要す。尚この宛書は源四郎方とあり、前述の定信、信好系を思わせるが、肝煎申付状は左京方となっている。

(一) この左京が本系図の三男信知で、常に兄信好の補佐役として活躍し、この家系がのちに三郎兵衛ともなっている。耳川の合戦で後陣に残ったのは前述の通りで、高政時代は肝煎も勤めている。但し、玄蕃信好の名がないのは、信好が前述の高帳を毛利藩に差し出した慶長六年以後隠居したか、かなりの高齢を意味し、嫡子太郎七信久(源四郎の呼称かもしれない)が夭逝したか武士を捨てて庄屋職に身を引いたため、肝煎はその間、佐伯遺臣の左京に顔を立てたものと思われる。

(二) 四男監物信武については、前述した通り、『鶴藩略史』に記載があり、前記の史料叢書五二、五三にもその名が見え、高成公時代の寛永七年三月朔日の「従其浦毎年納物之内宥候寛」の宛書には、庄屋源太夫とあり、寛永七年に信武の生存が知られる。

(四) ところで、本系図では一般系図にない二男道隆の名がある。この道隆は通し字の信を用いず、私見では庶子ではないかと思われる。成人した道隆は伊予に渡って法花津氏の吉岡城代として迎えられ、一つ巴を家紋として戦国時代に活躍するが、現在宇和郡吉田町地方の御手洗氏の祖となっている。又、天正年間に清涼山安楽寺を建立し、「吉田古記」によれば、佐伯に往來の途中、病で松浦に死去とあり、安楽寺には立派な五輪墓が残されている。^(註6)

以上大ざっぱに四兄弟をみたが、佐伯地方では各地に分出組が派生するので、次は項を改めてその流れを追ってみた。

各地に分出の一族

現在になると、佐伯市内に同姓の居住者が多くみられ

るが、明治四年頃の佐伯藩時代屋敷図によると、同姓の城下町の居住者は御手洗周五郎の一家のみである。これからも非常に保守的な土着性の強い一族ということがわかるが浦方からみることにする。

イ 米水津浦色利浦 色利の同姓の系図はすでに紛失しているが、本系図によると、八代新四郎信度の妻が高木宗兵衛の娘とあり、以後養子縁組などにより同姓が派生したものと思われる。文化三年の伊能忠敬の「九州測量日記」には、米水津の大庄屋として御手洗与七郎の名があり、蒲江大庄屋御手洗嘉蔵とある。

ロ 蒲江町丸市尾 蒲江の御手洗系図によると、同地の氏祖とする信武の三男伝右衛門信隣が丸市尾浦住居とあり、近世も割合いに早い時期の移住が知られる。

次に在方みることにする。

ハ 堅田地区 堅田は昔から海浜として栄え、中世期から港としての要素が強いため、佐伯氏時代からすでに下浦を預かった竹野浦御手洗の分出組がみられる。

ニ 弥生町床木地区 この同姓は実にはわかり難い。

古く「宗鎮隠れ」の伝承があるが、この宗鎮について、一説では大友宗麟の重臣が大友氏の敗北と共に床木に隠

れたとする以外に立証するものがない。この宗鎮の家系が、のちに毛利藩時代の尺魔神社の祠官を勤めたとしてその系譜を御手洗且人氏に見せて戴いたが、元禄十年五月の火災のため、それ以前の史料を全部焼失したのは残念である。この宗鎮を床木地区の同姓の祖とする場合、どこから床木入りしたかが問題になる。

宗鎮の宗は宗麟の宗であり、鎮は宗麟の実名義鎮から一字もらったとすれば大へんな武將に思われるが、佐伯氏に仕えた御手洗以外に、筑前の御手洗、大野川の御手洗にしても、大友氏の歴史の中で、同紋衆や他紋衆をさしおいて新参衆が重臣になった例はなく、隠れる背景にしても、耳川の敗北戦は床木と距離がありすぎ、丹生城における宗麟と島津戦以外は考えられない。ただしこの時は、大友の重臣斉藤勢が活躍しているが、この斉藤鎮実と佐伯氏との関係は次の如くである。

佐伯惟教が氏姓の争いで伊予に亡命中、梅牟礼城はこの鎮実に管理された。そして大友氏と筑前との攻防が熾烈になると、鎮実は秋月氏と対峙することになる。この時、『佐伯史談』一三七号の冒頭に書いた御手洗五郎三郎が活躍している。五郎三郎は、魚商に化けて魚の腹に

手紙を入れて連絡をとり、無事鎮実の娘を秋月方から取り戻す武勲を立てて、宗麟からも賞讃されている。この五郎三郎について、『大友興廢記』の「人質取返事 附立願歌之事」の項に、「爰に鎮実の侍、御手洗五郎三郎と云う者あり。本は佐伯惟教の侍なりしが云々」とあり、惟教が伊予に亡命中、斉藤方にこの五郎三郎が従ったことを立証している。そのためこの五郎三郎の家系が問題になるが、勿論御手洗本系図にも残存する一般系図にも記載がない。

ところが、床木には唯一つの資料として、柿ノ木部落に現存する供養塔に、元和九年（一六二三）閏八月造立の施主名として、御手洗勝右衛門の名がある。この勝右衛門について、前述した宇和郡吉田町の御手洗家には、道隆の子道安が勝右衛門を名のり、世襲名としての系図が残されている。してみると、道隆の伊予に渡るまでの佐伯の本貫地は床木であり、子供達の誰かが床木をついだことも考えられる。うがった推測になるが、私見ではこの子供の中に五郎三郎があり、保守的な一族の中で、庶子道隆が伊予に渡ったように、子も又斉藤氏に従って筑前に雄飛した者がいても不思議ではないと思っている。

更に五郎三郎は筑前の勲功により鎮実から一字をもらい宗麟の出家と共に宗鎮とするのは如何であろうか。ちなみに、現福岡県八女地方に繁栄し、三頭左巴紋を使用する一族は、この五郎三郎系以外に考えられず、床木の同姓も殆んどの家が同紋を使用している。

ホ 海崎地区 前記の天正十六年参宮帳の八月二日の項に、佐伯ひあなふけん坊・てし定泉坊と並んで、御手洗右衛門尉殿・御息与次殿とあり、戸穴地方の有志の参宮とみれば、この御手洗は海崎地方の同姓の祖先に違いないが、どの家系の流れか現在まで資料がない。

へ 直川村の赤木、仁田原地区 文化九年の百姓一揆で屋敷を襲われた者の中に、赤木村の御炭山手代御手洗新助の名がある。私は今春同地を採訪したが、どこから入った一族か史料は得られなかった。唯古地区によれば米水津と木立、堅田の間道は、近年こそ浦代峠を越えるが、昔は元越山を越えていたらしい。そして現地に入ってみると、堅田から大越を経て赤木に出る古道は、以外に近いことを知った。米水津や堅田からの移住にしろ、やはり同族であろう。

おわりに

以上御手洗姓氏について、特に佐伯地方の同姓についてその系譜の流れを考察したが、拙著『巴の鏡』を出版以来、他県からの問い合わせも多いため、三回にわたる本稿で言及しなかった同姓について、この場を借りて簡単にその流れだけを付記することにする。

1 静岡県地方の同姓 一説に家康が武田氏に追われた時、朝食のため手を洗ったことから、家康にもらった名字の説(註7)があるが、私見では甲斐御手洗氏の分出組と思われる。

2 和歌山市木ノ本海岸 同県粟島神社と米水津小浦の粟島神社との関係から、徳川期に米水津湾の同姓が住みついたもの。

3 愛媛県北部御手洗姓発生の時期に大崎下島から移住したものあり。

4 中国地方 先ず特筆すべきは、大崎下島の一族の支流が安芸に渡り、毛利氏の進展と共に行動を共にする。長州毛利藩の家中にその名あり。又瀬戸内海沿岸は交易船で土着した者、筑前から移住した者、大友の除国で豊

後より渡った者様々であるが、その他に独自に派生と思われる「みたらし」一族もあるが、未だ調査に至らず。

5 津和野の同姓 幕軍が長州征伐の時、萩藩の同姓家中が追われ、子を旅役者に託したが、役者は難をさけて津和野の山に入ったという。

6 熊本県菊池、合志郡 宗麟が肥後を制圧後、両郡を斉藤長実(鎮実の父)に託したが、のちに斉藤摩下の大野川流域の御手洗大蔵丞が一部を管理し住みついたもの。(註8)

7 長崎県五島の福江市地方 上方から交易船により住居した伝承あり。御手洗島から雄飛組の支流と思われる。

8 鹿児島県出水市地方 関ヶ原で敗北した島津軍が逃走帰国の際、瀬戸内海を水先案内した同姓が、その功により同地方を受領し定住したという。系図も存在したらしいが現在まだ確認に至っていない。

付記は現在までの調査結果を概略的につけ加えたが、興味のある方はその流れから夫々の祖先を探すと共に、新しく史料発見の時は、そのつど御教示願いたいと思っ

ている。

終りに、本稿が同族や問い合わせの参考になれば幸甚と願いつつ、私的な姓氏考にも係らず、紙面をさいて戴いた史談会に厚く御礼を申し上げます。

註

- 1 蒲江町史所収
- 2 大山積神社関係文書 伊予史料集成5景浦勉編
- 3 大分県史料 (37) 佐伯藩史料内
- 4 大分県史料 (11)
- 5 大分県史料 (25)
- 6 吉田町誌 上巻 系図は同町御手洗康夫氏所蔵
- 7 伝説の浜名湖 御手洗清著
- 8 「増・編年大友史料」(8)一八二・二八〇
(23)一八一五四号史料
「豊後大友氏」芥川龍男著所収

表紙解説

海潮山観音寺跡の宝篋印塔

直川村赤木中津留

中世の頃、下方県道沿いに一寺が建立されていた。この寺が仁田原の宝林山正定禅寺の前身で正定寺跡と呼んでいる。この跡地にあった宝篋印塔一基（在銘天正七年己卯十月五日）が正定禅寺の墓地に移されている。

ここ観音庵の古塔群も正定寺跡より移されたものである。多数の古塔の中で最もすぐれたものはこの宝篋印塔で、高さ一・七米あり、塔身上部に納経穴がある。惜しいことに銘記はない。他に小形の宝篋印塔の二基があり逆修塔である。それには永正九年壬申八月彼岸日施主敬白とあり、小形だが整っている。

「直川の文化財」より抜粋